
留風探偵事務所 開闢編

鈴也亜季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

留風探偵事務所

開闢編

【Nコード】

N9227W

【作者名】

鈴也亜季

【あらすじ】

依鈴御影は、辛い時に必ず見る夢がある。それは天使の夢。

大学卒業を前に、就職が出来ていなかった。それどころか、住み慣れたアパートを追いついてしまいかもしれないのに、バイト先からは首を言い渡された。

そんな時、大学で見つけた、探偵事務所の募集広告が目に入る。それを見つけた時に、嘗ての恋人だった中森隼人に意見を聞こうとしたのに、中森は別の事を話しだし、御影を憐憫の表情でみてい

たのだ。

中森はそこに何か書いてあるようには見えなかった。だから、御影の事が心配だったのだ。

そんな事は解らない御影は、悲しかった。だから、中森が何かを言いかけた時に逃げ出していた。

その所為とは言わないが、その広告の事を忘れていた。

それが最後の頼みの綱。

だからなのか、その番号があり得ない番号だと気付きもせず、電話をしてしまっていた。

それが悪魔との出会いとなるとは、思いもせずに。

1 試練

果てしなく広がる花畑。その中の一輪の花にすぎない自分がいる。そこで咲いているのはただの偶然。

でも、そこで咲けた事が嬉しかった。

時々しか現れないが、その人がそこに来て、花を見てホッとするその一瞬の喜ぶ笑顔を見る事が出来たから。

自分だけを見ているのではないとは解っていても、必ずその場所で立ち止まり笑顔を見せてくれた。

その人の笑顔の為に咲いていたいと思った。

でも、誰かがその笑顔を見る事を許してはくれなかった。花であるがゆえに、誰かに散らされる。

笑顔を見ていただけだったのに……。

自分でその人の元へ行けたら……。

だからなのか、その人の元へ飛んでいける蝶に転生した。

あの人は？ 笑顔を見せてくれる？

寂しげに佇む姿を見つけた。

何故笑っていないの？ 何がそんなに悲しいの？

そう語りかけたとも、その人にとって、私はただの蝶。

笑って！ 悲しい思いをしないで！ そう思いながらその人の側で飛んでいる。

気づいてくれた？

笑顔を見る事ができた。

なのに……。

蝶だから？ 再び誰かの手にかかり、無残に切り刻まれ、花だった時の様に、その身を散らされた。

「いや……！」

何度見ても慣れる事の出来ない夢。

辛い事があつた時、嫌な事があつた時。そんな時に決まってる夢。

この所、毎日同じ夢ばかりみる。それだけ自分におかれた状況が、切羽詰まっているという事なのかもしれない。

大学卒業間近ににして、就職が決まらず、身の振り方も決められずに、明日の生活の保障もない。

バイトで食いつないではきたが、それだけでは、この先どうなるかわからない。

どんなところでもいい。なんとか就職したい！今はそれだけだった。

「やばい！大学行かなきゃ」

就職が決まらないだけじゃなく、卒業の単位を落とされては、身も蓋もない。

夢の中の花の様に咲いていればいいわけでもなく。蝶の様に生きていればいいだけでもない。

人が生きるためには、努力をしなくては、自ら散ってしまうのだから。

切ない夢に感化されて、物思いに耽ってなどいられない。

そう自分を律して、大学に行く準備をしながら、厳しい現実をいきている事を実感していた。

依鈴御影は参っていた。
えすずみかげ

年も明けて、心機一転といたところなのだが、事態は最悪を通り越し、諦めともいうべき事態が好転する事はなく、卒業まで、後一カ月となっていた。

就職の為、申し込んだ先への面接に悉く断られ……ならまだし

も！試験を受ける事も面接を受ける事も出来なかった。

事故で、会場に行けなかったり。

バスの故障で、足止めを食った拳句に、道に迷ったり。

地下鉄を利用すると、痴漢に遭った人の証言を頼まれたり、スリにあったり。スリにあった時は、未遂で済んだが、結局それも面接に行けず、スリを警察に引き渡すまで足止めされてしまった。

とにかく、試験会場や面接会場へいけないのだ。

悪と不の付く言葉の全てが、自分の元に集まった様な状況を味わっていた。

周囲の友人たちや、大学の先生までも、最近では声もかけてくれなくなっていた。

もともと、そんなに友人の多い方ではないし、そんなに目立つ存在でもない。

だが、此処まで不運と悪運に付きまといわれてしまつては、有名にならざるを得ない。

こそこそと陰口を言ってるのが解る。

就職活動をするまでは、普通に過ごし、受ければすぐに就職も決まるだろうといわれていた。

これまでが割に何事も無く、自分では順風満帆に過ごしてきた事もあり、この先もそうなのだろうと思っていたのだ。

他人から見れば、苦勞の多かった人生と言われがちだが、本人はそうは思っていない。

乳児院、孤児院を渡り歩き、高校二年の時に、たまたま買った宝くじが当たって、それを機に、一人暮らしを始めた。

入試では苦勞も無くすんなり合格したし、これまでもバイト先に恵まれ、これまでなんとかいろいろ切り詰めながら、生活してきた。だがそれも後僅か、卒業を前ににつきもさつちもどうにもならない。

親も無く一人暮らしをする事で、どれほどのお金が必要なのか。全て計算して、卒業するまでなんとか持ちこたえていた。

就職さえ決まれば……。

「は~~~~~っ」

足蹴く通う大学の募集広告の前で、果てしないため息が漏れる。どれもこれも見慣れた、募集期間の過ぎた物ばかりだった。

その時、ふわりと風邪が吹いた。

どこから吹いた風だったのか？それとも、自分のためいきだったのか？思考さえ回らなくなっていた。

風が、見慣れた募集広告を揺らす。

その時、ある広告の文字が御影の目に飛び込んできた。

期限切れの募集広告ばかりの貼られている下に、赤い紙での広告の“無期限”の文字！

「うそ！」

慌てて、隠れていた広告をめくり出す。

『留風探偵事務所……各種保険有り。住居提供！マジで？』

「御影……おい！御影！」

「え？あ……中森、何？」

中森隼人は、数少ない御影の友人と呼べる人物だった。というより、中森だけが友人だったかもしれない。

みんな、御影をよけて遠巻きにし、悪運が移るとか、不運に見舞われると声をかける事は愚か、挨拶もしない。

「何そんなに真剣に見てたんだ？」

「ねえ、これ……どう思う？」

「え？」

御影は、赤い紙に書かれた募集用紙を、中森に見せた。

中森はそれを受け取り、ちらりと目配せただけで、短くため息をついた。

「お前さ……面接。ことごとく落ちたんだった？大丈夫か？」

中森は、御影に同情しているのだろうか？未だ就職も決まらず行

くあてもない御影を心配しているのだろうか？

中森は、大学に入ってから御影に交際を申し込んできた唯一の男だった。

坊っちゃん風の、真面目な印象だった中森。

なんとなく勢いで言われたためか、その時は簡単にOKしてしまったが、付き合ってみると、育ちの違い。考え方の違い。お金の価値観の違いなどで、御影が負担に思うようになり、嫌いではなかったが、結局別れる事にしたのだ。

将来は、親の会社を継ぎ、就職活動という一般の人のする苦勞はしなくてもいい立場の人間だ。

今でこそ、遊び人の様に振る舞ってはいるが、本当は純真で、優しく、意外と生真面目な今時珍しいというに値する人物だ。だからこそ、別れてからも友人で居られたのかもしれない。

身分差の様な事をひけらかしたりもしなかったし、これまでもそんな事を感じさせたことも無かった中森。なのに、こんな状況だからなのか、憐憫の目で見られた事が、情けなくもあり、寂しかった。こんな思いをするなら、他の者たちと同じように、シカトされた方が増しだ。

「落ちたんじゃなくて、受けられなかったの！だから聞いてるんじゃない。この内容・・・もう決まってるのかな？悪くないと思わない？」

最後のプライドを振り絞って、明るく振る舞う御影。

再び、中森がその広告に目を向けるが、中森にはその赤い紙に何かが書いてある様には見えなかった。

ただの赤い紙というだけの物。それを真剣に見て、募集広告をみてくれという。

精神を病むほど切羽詰まっているのだろうか？

中森にとって、御影は大学に入って初めて話した相手であり、一目ぼれした相手だった。

別れを告げられても、御影を忘れる事などできなかった。だからこそ、友人のふりをして、女に弄ばれているふりをしてでも、御影の気をひいていたかった。

今でも忘れてはいない。好きなまま。ずっと変わっていない、あの頃も、今も。

だからこそ、最後の勇気を振り絞った。

「御影。おれ、留学する事にしたんだ」

唐突にそう言われても、御影は言葉が出てこなかった。

「・・・・・・・・え？」

「留学。本気で会社を継ぐ事を考えてる。だから、留学して経営学とか勉強する気になったんだ」

「・・・・・・・・そう」

「卒業式出るだろ？」

「うん」

御影は、思考回路が停止した。

「卒業式までお前が就職決まっていなかったら・・・・・・・・」

中森が言葉を詰まらせた。

「あ、今何時？やば！バイトの時間に遅れる。まだ後一カ月もあるのよ、縁起でもない事言わないで！じゃあね」

中森が何かを言いかけたその言葉を遮るように、御影は、中森から逃げるようにその場を後にしていた。

同情なんかされたくない！

と否定をしているが、御影は、中森がまだ自分の事を思ってくれている事を知っていた。

「御影。やっぱさ、お前じゃなきゃダメそうだ。諦めて俺と結婚してくれよ」

女に振られるふりをしながら、ぼやく。

中森は誰とも真面目につきあった事はない。嘘をつけない性格だ。

何もかも解り合っているからこそ、そうはしなくなかった。
こんな時だからこそ、自分に負けたくなかった。

今、中森に何か甘い事を言われてしまったら、それに縋ってしま
う。

中森だからそうしたくなってしまう。中森だからそうはなりたく
ない。

二つの相反する正直な気持ちだが、御影の中で鬨^{せめ}ぎ合っていた。

御影の現状は、一向に明るい兆しが見えない。というよりは、事
態はもっと切羽詰まっていた。

バイトの量を増やそうと、コンビニの店長に交渉しようと思った
矢先……店長の方から、クビを言い渡された。

バイトではなく、正社員として2人決まったかららしい。

そのコンビニで、社員募集しているなど聞いた事が無かった。
知っていれば、自分になっていた。

バイトだけしか雇わないと言っていた筈だが、本社からの派遣社
員だから断れないのだと。

最後のバイトも今日で終わり。

僅かなバイト料は、一体いつまで凌げるのだろうか？

そして、アパートに帰宅をして、更なる試練が待っていた。

「ええ………そんなあ」

アパートの立ち退き宣告書。

6ヵ月分の家賃が払えない場合は……というものだった。

到底今の御影にそんなお金はない。

期限は、大学の卒業式の次の日。

今すぐと言われないだけ増しなのかも知れないが、後一週間しか
ないのにどうすればいいのだろう。

以前のアパートの管理人だったのなら、こんな無茶な事は言っ
てこなかっただろうが、悪徳とも言われる業者に転売され、無理や

り追い出された人もいた。

交渉するだけ、骨折りだろう。

マツチの灯程ともしびの灯りも見いだせない現状。

「はあ~~~~~っ。中森に、結婚してって言っちゃおうかな・
・・・・」

自分でも情けなくなるくらい、くだらない発言を口走っていた。

嫌いじゃない。きっとあいつとなら、友人のままの関係を保った夫婦のなれそうな気がする。

中森の両親も、暖かな人たちだ。

御影の育ちを知っても、見下す事はなかった。それどころか、頑張って生きてきた事を褒めてくれた。だからこそ、そんな事を口走った自分が情けない。

奈落の底かと思えるほどに、自己嫌悪に陥った。

「もうやだ・・花の様に、蝶の様に・・散ってしまいたい~~~~
~~~~」

座りこんで、机に突っ伏し、暗闇で寒い部屋で、かばんの中身が散らばっていくのをボーッと眺めていた。

「・・・・・あれなんだっけ？」

鞆の底に入っていた赤い紙。

ずっと忘れていた。大学で見つけた募集広告だった。

暗闇で、そこに書いてある文字が読める筈がないのに、なぜか広告が赤い事も、文字の内容も、ハッキリ解る。

それが不思議とは思わない程、御影は切羽詰まっていたのだ。

携帯に手を伸ばし、表示してある番号にプッシュした。その番号が、あり得ない番号である事に気づきもせずに・・・・・。

## 2 悪魔の契約

御影は、一張羅のリクルートスーツで足を運んだ場所は、都内でも有名な風俗店の多い場所だった。

なんとなく、場違いな所にいる様な気がする。

昨夜の電話の後、寝たという記憶がないが、夢を見た覚えはあるのだから、きっと寝たのだろう。

気づいたら、電車に乗って、その場所に赴いていたのだ。

今でもこうしてその住所の場所を探している事も現実ではない様な気がする。

まるで、体と、思考が別の行動どうをしているようだった。

前夜。

番号を押し終えて、三回のコールで相手が出た。

なのに、相手は何の返答もない。沈黙だった。

「もし？もし？」

携帯が壊れてしまったのだろうか？そう思い、声を出してみた。

「何だ？」

出ているなら、なんとか言えばいいのに！

「留風探偵事務所でしょうか？」

「そのつもりでかけたのだろうか？」

何だこの対応は！そうは思っても、自分の立場的に、強くも言えない。

ここは下出に出るしかないのだから。

「間違っていないのか確認を……」

「用件はなんだ！」

しまいまで言い終わらぬうちに、傲岸な言葉を放たれてしまった。なんとなく頭にくる態度ではあったが、気の短い人なのだろうと、自分に言い聞かせる。

「大学に、公募の広告が合ったので、まだ決まっていらないようでしたら、面接をお願いしたいと思ってお電話しました」

御影も簡潔に、事務的に言い放つ。

「大学の公募？・・・なら、住所の場所に出向いてこい。此処までこれたのなら、採用する」

「はあ・・・え？」

初めて自分に告げられた採用という単語に一瞬何もかも思考が飛んだ。

だが、今まで面接会場に行けた試しがない事を思い出し、慌てて住所を確認してみた。

やっぱり、住所など何処にも書かれていない事に気付いた。

「住所の場所って？」

「字が読めないのなら問題外だ」

「ちょ、ちよつと待ってください！住所が書かれてないのに、読めるも読めないもないでしょう！」

「だったら諦める。不採用だ」

「教えてください！必ず行きますから。お願いします」

電話だというのに、頭を下げてしまうのは、日本人の本能なのだろうか？公募の養子めがけて下げた頭は、しこたまテーブルにぶつける。

これを逃したら、もう後はない。

御影も必死だった。

「・・・名前ぐらい名乗れんのか？」

御影が頭をぶつけた音が、携帯を通して解つたのだろうか？痛みが少し遠のいたのを見計らった様に、相手の男が言葉を紡いだ。

「す、すいません」

なんとなくではあったが、携帯の声を通して、笑われている気がした。

「依鈴御影と申します」

「・・・」

それには何の応答も無く、沈黙だった。

「あの……」

「何故だ!？」

名前を名乗った時に、何故だと怒号の様に問われても、返しようのない疑問符に、反対に何故と問うてしまいそうになる。

「……住所を」

「よく見るんだな!」

「え?あの!もしも?もしも?……切っちゃった……」

ため息と共に、携帯の表示時間を見ると、夜中の二時十分だった。

そんな時間に、電話をかけられれば、誰でも不機嫌になるだろう。いくら時間指定が無かったとはいえ、随分失礼な事をしていた事に気づいた。

記憶はそこまでで、その後は、電車に乗っていた所からの記憶。電車の中で、なんであんな夢を見たのだろうか?そんな事を考えていたのだ。

その夢は、いつもの不安な時に見る夢。

花として……散らされ、蝶として散らされる。

だが、その日は、その続きがあった。

小さな芽を出し、小さな花を咲かせ、大木になる。

誰もがそこに来れば木陰を楽しみ、癒される場所となる。

あの人に来てくれる場所となれるように……。

ただ、その人を待っていた。

住所の場所を探してはいるが、怪しい名前の書いてある看板のあるビルばかりが目立つ場所で、探偵事務所の様な物がある場所とはとても思えない。

二回、三回と辺りをうろうつろとしてみたが、やっぱりなかった。そんな事をしながら、ある考えに思いついた。

探偵事務所と言う名前の風俗店？

別に風俗が悪いとは思わないが、御影はあまりに経験不足だと思う。

恋愛経験と言えば、中森だけだったし、それもキスがやっとの間柄。

もう少し経験していてもいい筈なのに、その辺の高校生よりも奥手の域に入る、中学生並みだ。下手をすれば中学生でももっと経験しているかもしれない。

「やっぱり・・・やめよう。これが私の運命なんだ！」  
辿りつかない。

最後の頼みの綱も、面接を受けられずに終わる。

それで良かったのかもしれない。自分に言い聞かせ、思いつき振り返った。

人の気配など、全く感じなかったのに、振り返ったそこに人が居た。

自分の体が、跳ね返る程思いつきぶつかっていた。

「ごめんなさい！すいません！気付かなくて、本当にごめんなさい！」

後ずさり、腰が曲がった状態で、誰とぶつかったのかも確かめず、頭を下げていた。

「Peace a bird？」

あまりに綺麗な英語の発音にそろそろ顔を上げた。

そこには、？ 軀で碧眼金髪、見るからに高価と思えるブランドだらうスーツを着崩して、普段着の様に着こなしている。

あまり、人の姿を見て見とれたりすることのない御影でも、思わずカッコイイと思う程素敵だった。

「そ、そ、そーりい」

顔が引きつっているのが解った。

英検１級だというのに、こんな馬鹿げた言葉しか出てこない。しかも、英語の発音からは程遠い物。

「俺は、国会に立候補した覚えはない」

真顔で綺麗な日本語での反論。一瞬何の事かと思ったが、そーリイが、総理に聞こえたのだろう。

『こんな所で、親父ギャグを言うわけないだろう！』と心で叫ぶ。

「ごめんなさい」日本語で謝る。

「行かないのか？」

普通に謝ったのに、行かないかって？いいですよの間違いでは？でも、その外人は、御影が持っていた、公募の赤い紙を見ていた。「え？・・・ああ。もういいんです。場所が見つからないので、諦めました」

「別にどっちでもいいが、そのまま落ちる所まで落ちるのか？少しでも可能性を見出すかはお前次第だ。好きにしろ」

「・・・・・・はあ？」

言うだけいうと、そのまますぐわきの、細い路地の方に入って行ってしまった。

クシャリと握り閉めた公募の紙は、文字など読める筈はない。

でも、あの外人は「行かないのか？」そう言った。

これが、公募の広告だと知っているからだろう。

「何よ！どういう意味よ！」

その外人の入って行った裏の路地を睨む。

だが、既にその外人の姿は見えなくなっていた。

「どんだけ足が長いのよ、嫌味な奴！」

誰もいないその路地に当たっても、仕方がない。

だが、その路地の所に、目立たない様にして〔留風探偵事務所〕とあった。

「こんなの見つけれられないじゃない・・・・・・」

その路地の奥に、何かがある様には思えないが、あの外人が入って行ったのなら、何かがあるのだろう。

その看板があまりにみすばらしく、とても風俗店には思えない。自分の考えていた様なものではなかった事に、少しほっとした。

だが、そこに行つていいのだろうか？そこに来て、なんとなく違和感を覚える。

あの外人の言葉が、なぜか枷になっていた。

だが、昨日話した事務所の人の言葉が気になる。

「何故だ！」

耳の奥で、その声が木霊した。

その瞬間、そこに向かうべく足を踏み出していた。

何もない、ビルとビルの狭間。先が解らないという不思議な感覚。麻痺しているのだろうか？

まるで、自分で考える事を拒否している。美鈴は、それを自覚していた。

「ここ？」

突然現れたそれは、四角い空間の様に、違和感無く佇んでいる。スーツと開かれたガラスの自動ドア。それがドアだと思わなかった。

音も無く開き、中に入ると、再び音も無く閉じる。

辺りを見回すと、受付の女性が、自分の爪を眺めたり、いじったりしている。

アートをされたそれは確かに綺麗だとは思うが、職場でそれを気にして、お客かもしれない人物が入って来たのに気にも留めないのはどうかと思う。

「あゝ」

「何？」

予想を裏切らない対応。御影の方を見ようともしない。

「留風探偵事務所はこちらですか？」

「何の用？」

否定しないという事は、そうなのだろう。

「面接に来ました。何処に行けばいいでしょうか？」

やっぱり、ちらりとも、目配せもしない。

「そっち。扉が開く方に進んで。拒否されなければ行けるんじゃない？」

「ありがとう」

その時初めて御影を見たその女性は、まるで小馬鹿にでもするように、鼻で笑う。

その仕草が、嫌味な程綺麗だった。

美人で、スタイルも良くて、色っぽい。

「はあ」

思わずため息が出てしまう。

「何？」

「此処の採用の基点は、顔ですか？スタイルですか？それとも色気ですか？」

さつき会った外人も、美しかった。

この受付の女性も、美しい。

御影は、そのどれにも当てはまらない。

平凡な容姿。色気でいえば0とは言わないが、落第点。スタイルは、幼児体型で、自慢できる体系ではない。

「変な子。どれでもないけど」

冷たく言い放たれた。

気を取り直し、言われた方にむかう。

辺りは入口など何処にもない様に思えたが、突然扉の様に、壁が開く。

吃驚して、受付の方に目を向けると、そこにいた筈の女性が居なかった。

言われた様にそこに入ると、スーッと入口が閉まる。

「え？何？ちよっと！ここから出して！ちよっと！誰か！助けて！」

閉まったドアらしき場所を叩き、叫んだ。

そこは閉塞された空間。明りが何処から灯っているのか解らない。壁の境も解らない。まるで異空間だった。

そこで、初めて何もかもが、おかしい事に気付いたのだ。

「閉じ込められたの？私……拉致されたの？」

そう呟いて、足の力が抜けて行くのを感じていた。

「うわ……っ」と

屑折れそうな状態だった所で、突然壁が開いたので、つんのめりそうになりながらなんとか堪えた。

「吃驚した……突然開かないでよ！」

なんとか体制を整え、ふと目の前を見ると、そこには高い所から見ている様な大パノラマがあった。

曇りひとつない、人の世が広がる。

「天が人界を望むとすれば、こんな世界なのかな？」

自分の置かれた状況も忘れて、その景色に見とれてしまっていた。  
雲煙過眼。

御影とは、そういう性格だった。

「何をしている？」

「え？」

声に驚き振り返ると、？ 軀で碧眼の黒髪の男が立っていた。

さつき会った男に似ている気もするが、違う気もする。

「何をしている」

同じ言葉を繰り返した。

「これを見ました……あの、ここっておかしいですよ？」

「そうだろうな」

否定してほしかったのに……。

「外であつた人も、受付の人も、貴方も、この景色も」

「外で？」

「みんなおかしいですよ！綺麗すぎます！」

急に腹が立つてきた。

「……そんな事が、おかしいのか？」

それが当たり前前の様になっているのか、淡々と話す事が一層御影の癪に障る。

「そうよ！」

「依鈴御影」

「あ、面接……此処なの？」

「此処にこれたら採用すると言った」

「待ってください！……やっぱり、お断りします」

「それは無理だ」

「どうして？」

「何故ここに来た？」

質問を質問で返された。

「それは……貴方が何故って言うから……気になって……それで」

「それだけでここまで来たのか？」

「そ……そうです……でも」

男が、言葉を発しながら間合いをゆくりと縮めている。足を動かしている様には見えないのに、間合いが縮む。

逃げたいのに、足が動かない。

「私に気付いていたんじゃないのか？」

「何の事？……違います……会うのは……多分……初めて……だと」

綺麗な顔が目の前に迫って来た。

男の瞳が悲しげに鋭く御影を捉える。

「それでもここに来たのは、お前の天命だ！」

その言葉を紡ぎながら背に銀色の羽根が黒く広がった。

何故銀色なのに、黒く光るのか不思議だった。

何故羽根を持っているのか不思議だった。

「貴方は……何？……どうして？」

「私は悪魔。これが契約の証し」

御影は、羽根に包まれながら、体が熱を持つていくのを感じた。

そして、悪魔と名乗った男にキスをされた。

抵抗する事も、逃げる事も出来ずに。

なのに、触れた唇から、熱が冷めて行く事に身を委ねながら意識を手放した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9227w/>

---

留風探偵事務所 開闢編

2011年9月28日03時24分発行